全国港湾四役・単組役員

新年のあいさつ

全港湾・真島勝重
（中央執行委員長）

謹んで新春をお祝い申し上げます。

2022年の干支は壬寅で、厳しい冬から、春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になるというような意味ですが、そのような年にみんなでしていきましょう。

全国港湾は、今年結成50周年を迎えますが、日本の労働運動では、産業別労働運動で今日まで頑張っているのは全国港湾しかないと言っても過言ではない。港湾は、激動の転換期を迎えている中において、個々の企業単位で行政や企業に交渉しても太刀打ちできないどんな時代だからこそ、当たり前だと思っている港湾産業別労働運動の重要性をみんなで一念通天し、更に前進させていかなければならない。

港湾労働者不足が叫ばれている中、私たちが港湾の魅力を発信して、如何にして多くの若者に働きやすい労働環境や賃金を確立していくか、当面する直近の課題は2022港湾春闘である。

今日現在で春闘時のコロナ禍の状況がどうなっているか予測はできないが、この2年余り、春闘の中央団体交渉はかつてのような大規模な対面交渉で行われていない。岸田首相は、「新しい資本主義実現会議」で、2022春闘に向け経済界に3％の賃上げを行うよう要請した。実現会議には、経団連会長や日本商工会議所会頭、連合会長ら労使の代表が参加している。岸田首相は賃上げへの協力を求めると同時に、従業員の給与を引き上げた企業には税制面での大胆な支援措置を行うことも表明した。

そんなの絵に描いた餅だよと言わずに、この際、労働組合としてこだわろう。

さあ、政府のお墨付きを頂いた3％引き上げの金額をまず受けて、そこから春闘スタートだ。

私は、日本の港湾が10年先、20年先、次の世代まで魅力ある産業として残っていくために、最近、口ずさんでいる詞を青年層に捧げます。「夢はもう見ないのかい？　明日が怖いのかい？　諦めついたかい？　馬鹿みたいに空が奇麗だぜ!!…」　一緒に頑張りましょう！

日港労連・竹内一
（中央執行委員長）

年頭にあたりまして、本紙面をおかりし22春闘に向けた考え方を述べさせていただきます。

既に全国港湾中央執行委員会では22春闘方針案について審議を行い、2月8日から9日に掛けて開催されます全国港湾第14回中央委員会に於いて提出議案として皆様と共に審議することとなっております。

そのうえで、多岐に亘る諸課題が存在しますが、先ずは「大幅賃上げを目指す」ことが何よりも重要な取り組みであると考えます。全国港湾中央執行委員会は方針案のなかで大幅賃上げの必要性について大きく取り上げました。

この課題は、船社が史上空前の大増益を上げるなか或いは関係する港運元請事業者も好増益を上げるなか、特に港運専業・現業労働者にとって、22春闘の取り組みのなかで大幅賃上げの取り組みはまさに今やらねばならない必須課題であると確信します。

我々は、一連の新型コロナ禍のなかまさに命がけで現場で就労してきました。今こそ、大幅賃上げで以て各使用者は応えねばならない時期に差し掛かったといえます。

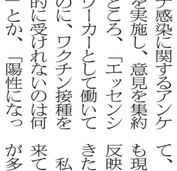
全国港湾は本件について、全国港湾賃上げ共闘会議の更なる深化を以て、各加盟組織が一丸となって取り組みを進めるべきであると方針案のなかで明記しました。

今こそ、我々は大幅賃上げ獲得に向け、団結して立ち上がらなければなりません。

その為にも、中央団交でいう産別の取り組みと各個別労使交渉が連動し、且つ我々が連携することではじめて実現できます。

今、まさに産別の真価が問われています。共に頑張りましょう。

全国港湾・髙島弘司
（書記次長）



新年あけましておめでとうございます

一昨年からのコロナ禍がまだ収まっているとはいえず、各単組・各地区で働いている仲間の皆様は、日々、感染予防に努めて働かれていると存じます。改めて、敬意を表します。

昨年10月から書記次長になり、3ヶ月が過ぎようとしていますが私には慌ただしい日々を送っているのが、正直なところです。

この間、全国の皆さんのご協力により、第2回目のコロナ感染に関するアンケートを実施し、意見を集約したところ、「エッセンシャルワーカーとして働いているのに、ワクチン接種を優先的に受けれないのは何故か」とか、「陽性になったり、濃厚接触者として保健所が認めた場合に有給にならない」等、不安を抱えながら働いている職場環境について改善を求める声が多く出ていました。

また、職種・地域によって求める内容が違うのがアンケート結果に出ていると感じたところです。

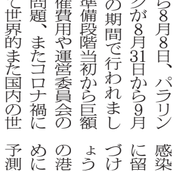
改めて、職場環境の改善、エッセンシャルワーカーと言われるだけでなく、名実ともに日本の物流を支えている港湾労働者の地位・向上をはかっている一員として、引き続き、これからも現場の声を出来るだけ、反映できるよう努力していきたいと思います。

私個人は、昨年、中央に来てまだまだ不慣れなことが多く、周りの皆様に助けられながら、日々過ごしています。

地区から、中央に来て感じたことは、非常に各々方が忙しく仕事をされている事、そのような中でも、お互いの立場を尊重しながら運営をされているのを感じている日々です。

そして、全国港湾結成50周年という節目の時に書記局にいられるということを喜び、努力していきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

検数労連・瀬戸修
（中央執行委員長）



港湾産別でともに闘う仲間の皆さん、明けましておめでとうございます。

本年もコロナ対策など不自由な状況が続きますが、宜しくお願い致します。

さて、昨年の大きな出来事では、東京でオリ・パラリンピックが開催されました。オリンピックが7月23日から8月8日、パラリンピックが8月31日から9月5日の期間で行われました。準備段階当初から巨額な開催費用や運営委員会の失言問題、またコロナ禍によって世界的また国内の世論でも、賛否両論が拮抗する中で、無観客や規模の制限、自粛・縮小などを取り組みました。日本は金メダルの多さではオリンピックで3位、パラリンピックで11位と開催国の面目を守れたのではないでしょうか。

また、アスリートの全力を尽くす姿によって、コロナ感染対策で自宅や医療施設に留まっている人々は勇気づけられたのではないでしょうか。開催地東京の周辺の港である京浜では、はじめに幹線道路の混雑などが予測されており、コンテナターミナルの夜間対応を協力する構えでした。しかし、無観客、選手やスタッフにも外出の自粛要請がされていたことなど、大きな混乱にはならなかったようです。

政治では秋の衆議院選挙です、菅政権から引き継いだ岸田内閣はこれまでの安倍・菅政策のイメージを変えようと、コロナ感染対策についても機敏な対応をアピールしてきました。対する野党共闘は共同候補の擁立で闘いましたが、自民マイナス15議席で261議席で32議席、立憲民主マイナス13議席で96議席、共産マイナス2議席で10議席、国民民主プラス3議席で11議席、維新プラス30議席で41議席、（その他の結果は省略します）過半数の233議席を自民党が単独で確保した結果となりました。また、今回の選挙で大躍進した大阪維新の会は改憲派であり、これに力を増した岸田内閣には改憲を強行させない運動が必要です。

産別では記憶に新しいところで、年末年始特別例外荷役を巡って協定当事者間で協議が難航したことです。この根底には21春闘協定の促進を促すために9月22日に日港協に提出した「中央労使政策委員会の開催に関する申し入れ」が重要なウィークポイントでしたが、その後の事務折衝など労使で精力的に事態収拾に努力し、各専門委員会の開催や具体的な協議を進める方向が約束され解決に至りました、今年はさらなる進展を期待します。

これからの運動強化の足掛かりとして、先に述べた衆議院総選挙における立憲野党の統一候補の推薦をしたことは産別運動の幅を大きく広げました。また秋越年の闘いの中では立憲民主・共産・国民民主の各政党へ行き懇談会を通して、抑制される港湾料金やコロナ禍で危険性が高い港湾現場の実態、今後の課題として非効率火力発電施設の削減や年を追うごとに自動化が進むコンテナターミナルなど課題は大きく、産別交渉だけでは限界があることから行政・政治を動かして可能性を広げましょう。

今年の干支は寅です、行政・政党への懇談に深化や産別労使での共同行動の模索など、より一層の運動拡大へ向けて（寅）トライアルの年にしましょう。

検定労連・遠藤一幸
（中央執行委員長）

新年あけましておめでとうございます。

一昨年から続く新型コロナ感染の拡がりにより、人々の生活スタイルは変化しました。外での飲食を控えるようになり、大企業ではテレワークやリモート会議などの感染防止対策も浸透しています。

日本はテフレから抜け出せず、消費税増税などにより需要が大きく落ち込み、企業の設備投資なども望めない状況でした。コロナ禍が追い打ちをかけ、自粛、倹約は企業や家計にとって合理的な判断とされましたが、その傾向はコロナ収束後も続くでしょう。

しかし全ての国民・企業が自粛、倹約を続ければ経済危機はより深刻なものとなります。所謂、合成の誤謬というものです。コロナ禍で倒産が相次ぎ、多くの非正規労働者は職を失うこととなった今、益々政治の役割が重要になることは確実です。健康で文化的な最低限度の生活を営む権利の保障は政府にしかできません。

新自由主義、自己責任論に立脚する政治家は、失政により国民をどれほど苦しめようとも、個人の選択や努力が足りなかったからとするでしょう。貧困や格差の拡大が止まりません。日本は政治の責任を果たそうとしない勢力が政権に居座り続けています。

メディアには自由競争を勝ち抜いたカリスマ経営者的な人物が持てはやされ、「政治の責任」よりも「自己責任」の方が格好の良いと感じる人が多いのかも知れません。しかし、新自由主義の裏側で利権に塗れ、嘘、隠蔽、改竄、捏造（うそ、いんぺい、かいざん、ねつぞう）、あらゆる政治腐敗の疑惑を明らかにできない政権に、国民の為の政治が出来るわけがないと私は確信しています。

昨年の衆議院選挙では腐敗政治の改革を進める事は できませんでしたが、今年も参議院選挙が控えております。政治を私たち労働者、国民の手に取り戻す大きな一歩となる年にしたいものです。

大港労組・小嶋敏弘
（執行委員長）

組合員の皆様、ご家族の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年2月の中央委員会では開催時に新型コロナウイルス感染症が拡大し委員会を1日での開催とし全国の組合員に向けてリモートでの発信となりました。

3月からの中央団交は開催されたものの少人数での団交になり思う様に進められず厳しい交渉となり各単組もたいへん厳しい交渉になりました。

また他産業では雇用止めや解雇などが発生するなどし、倒産企業などが多数出るなど日本だけではなく全世界に拡散する新型コロナウイルスの被害が続けています。

日本の労働環境は増え続ける派遣労働者・非正規労働者により賃金が上がらず各企業は人の確保に追われています。

こうした中で労働組合は賃金だけではなく、働きやすい環境づくりを目指さなくてはなりませんその為に大阪港湾労働組合は各組合と連携を大切にし、全国港湾の産別運動の強化に取り組んで行きたいと思います。

これから先益々港湾労働者にも厳しい風が吹くと思いますがどんな状況になろうとも全国の仲間の労働環境の向上を目指して仲間と共に一致団結して闘い2022年の春闘勝利に向けて頑張って行きたいと思います。

全倉運・中土居浩樹
（副中央執行委員長）

謹んで新春をお祝い申し上げます。

組合員の皆様、ご家族の皆様におかれましては、今年のお正月も、ご家族と共に楽しく健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、国や地域によるばらつきを伴いつつも、総じてコロナ危機による落ち込みから回復を続けてきた1年だったのではないかと思っております。欧米先進国では、ワクチン接種完了者比率が進み、防疫と経済活動の両立が進んできましたが、一方で、世界経済の回復ペースは、部品・原材料不足の深刻化、資源価格の上昇、中国の電力不足による生産減速などを背景に年末にかけ鈍化していきました。日本経済は、10月の緊急事態宣言解除後、飲食や宿泊など外出関連業種を含め、国内経済活動の再開が進んだものの、新規感染者数は低位で推移しており、まだまだ予断を許さない状況でした。

2022年はワクチンの定期的な接種、無料のPCR検査の拡大、医療供給体制の強化などにより、外出関連の経済活動が本格的に再開させつつ、医療逼迫を回避できるよう期待したいですね。経済活動も、半導体などの供給制約が、引き続き企業活動の抑制要因となりそうではありますが、コロナ危機下で積み上がった過剰貯蓄の一部が消費に回ることも考えられ、潜在成長率を上回るペースでの回復を見込めたら良いなと期待しております。

願望ベースでの展望を語りましたが、実際は我々労働者にとって、今年もまだまだ厳しい年になると思われます。しかしながら、少しでも皆様の待遇が良くなるように、力を合わせて精一杯頑張っていきたいと思っております。この新しい年が皆様にとってより良い年になるよう心より祈念いたしまして、私からの年頭の挨拶とさせていただきます。

全国港湾・玉田雅也
（書記長）

新年あけましておめでとうございます。組合員の皆様、ご家族の皆様のご多幸をお祈りし、ご挨拶申し上げます。

昨年は、コロナに始まり、年末には「オミクロン株」という新種が表れ、まさにコロナに翻弄された一年でした。その影響は、倒産や失業といった働く者の生活基盤を直撃する形で広がりました。そして悲劇は、医療体制がないために、医者にかかれない、治療を受けられないまま、自宅で死亡するという事態を引き起こしました。政治の貧困が生んだ悲劇、救える命も奪う「人災」ともいえ、悔しく、憤りさえ覚えました。今年は「寅年」ですが、悪政は人を食い殺す虎よりも恐ろしいという意味の「苛政は虎よりも猛し」という諺があります。これが今の永田町にはピッタリあてはまります。このままでいいはずはありません。

一方、港湾労働者は、コロナ禍にあっても物流を最前線で支える役割を担い続けています。だからこそ、その社会的価値に相応しい労働環境を整えられるべきだと思います。エッセンシャルワーカーと評価するなら、それにふさわしい労働環境と労働条件を整えられるべきではないでしょうか。

今年、全国港湾は結成50年を迎えます。先輩たちは、「魅力ある港湾労働の確立」を掲げてたたかい続け、今日の産別協定・産別制度があります。これを継承していくのが私たちに課せられた責務と重く受け止めています。50年の歩みは、「山あり、谷あり」「風雪の歩み」であったろうと思います。そして、これを乗り越えてきた源には、仲間の団結と集団的な知恵、職場のパワーがあったと確信しています。仲間の皆さんとともに、50年の歴史を経て、新たな産別の歴史が刻まれる年にしていきたいと考えます。